

# 博物館 Dictionary No.174

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ちしんかん え まきもの てんじ ぞうし え まき  
平成知新館 2F-1(絵巻物)に展示されている「おとぎ草紙絵巻」について勉強してみよう。

### つる そうし 鶴の草紙

つる そうしは、つるが登場する不思議な物語を絵に描いた室町時代の作品です。筋立ては、有名な昔話の「つる おんがえし」に似ていますが、少し違った展開になっています。どんな物語なのか、一緒に読んでいきましょう。

その前に、ひとつ知っておいてほしいことがあります。この作品は、まきもの形の形をしています。絵が描かれたまきものなので、こうした作品をえまきものよと呼びます。



《鶴の草紙》第一段 部分 京都国立博物館蔵

えまきものは、両手を使って横長の紙を巻きながら、続々と現れる場面を右から左へと見るものです。たとえば、上の写真を見てみましょう。物語の始まりの部分です。画面右方、わらぶき藁葺屋根の家で男が寝そべっています。ここは近江の国(今の滋賀県)。この男は奥さんを亡くして、人と会うこともなく山里にひとり暮らしていました。では、男がぼんやりと顔を向ける左方へ私たちも目を進めましょう。木々の間から道が現れ、そこに二人の人物が見えます。ある日男は、猟師が鶴をつかまえたところを見かけます。男はかわいそうに思い、鶴を自分の服と交換して引き取ることにしました。この場面からさらに左に進むと、男が鶴を空に放してあげたところが見えてきます。今見たように、この作品でも、三つの場面が右から左へ順番に、長く継がれた紙に描かれていることがわかります。絵描きは場面ごとの間に山や霞を描いて、それぞれを自然につないでいます。

さて、物語はどのように続くのでしょうか。鶴を放した翌々日、男のもとに美しい女がやって来ました。やがて男はこの心優しい女と結婚し、幸せに暮らします。しかし、このことが地頭(土地を管理する権力者)やその息子の耳に入ると、彼らは女房を奪おうと男に無理難題を吹きかけてくるようになります。あるとき、地頭は「わざわい」というも

のを連れて来い、と男に命じます。わざわいとは悪い出来事の名であって姿かたちのあるものではない、と男は困りますが、女房は自分の両親のところへ行けば、わざわいが見つかると言います。女房に言われた通り山を丑寅の方角（北東のこと。神霊の訪れる方角で鬼門ともいう）へ進んでいくと、豪華な邸宅がありました。男はそこで女房の両親から、わざわいという名の恐ろしい獣を与えられます。



《鶴の草紙》第五段 部分 京都国立博物館蔵

さあ、この写真の右側を見てください。わざわいが男の家に連れられて来ました。人間よりも大きな体、ギョロリとした金色の目、それに鋭い角や爪もあります。女房はわざわいに、男の言うことをよく聞けよ、と諭しています。いよいよ男は地頭の家に向かいます。左へ目を移しましょう。力を見せてみる、と言う男の声を合図に、さっきまでおとなしかったわざわいが暴れだしました。犬を噛み喰らい、家来どもを打ち倒し、稲妻のごとく走りまわります。こうした静から動への急展開は絵巻物ならではの演出です。とくに構図に工夫があります。右に描かれた男の家は、板戸や畳、縁側が水平線を多く用いて組み立てられているので、動きの少ない静かな感じですが、それに対して地頭の家は、倒れた屏風、外れた戸など、さまざまな角度の斜線が入り組んでおり、混乱の激しさがよく伝わってきます。とりわけ、画面を右上から左下に貫く畳や長押の線によって、逃げ惑う人々はまるで床をゴロゴロと転げ落ちるかのように見えます。この後、とうとう地頭は観念して、男を丁重にもてなすようになりました。帰宅して、男が女房にこのことを報告すると、女房は実は自分があの日助けられた鶴で、恩返しのため結婚したのだと打ち明けます。そして鶴の姿に戻って、空へ帰って行ってしまいました。



恐ろしい獣 名前は“わざわい”

室町時代には、こうした短いお話がたくさん生み出されました。不思議な出来事や、ためになる教訓を語るこうした物語を、お伽草子と呼びます。今も「おとぎ話」という言葉がありますね。現代に残るお伽草子の絵巻物のうち、鶴の草紙は、風景に金色の霞やたくさんの草花が控えめに添えられていて、とくに味わい深い作品です。室町時代には、貴族や武家の子どもたちがお伽草子を楽しんでいたようです。みなさんも昔の人と同じように、お伽草子や絵巻物を楽しんでみてくださいね。

(美術室 井並林太郎)